

## 根源的な非本来性とケア

——『存在と時間』における「依存忘却」について

松本卓也

### I. はじめに——「水平方向の精神病理学に向けて」<sup>1</sup>再訪

- ・ ビンスワンガーの人間学的均衡論： 垂直方向と水平方向のあいだの均衡を欠くがゆえに、挫折すなわち墜落を運命づけられた飛翔としての「思い上がり (Verstiegenheit)」のなかで統合失調症は発病する。
- ・ 治癒は、垂直方向の「父」から水平方向の「隣人」への方向転換において起こる（症例イルゼ）。
- ・ 「べてるの家」の活動で知られるソーシャルワーカーである向谷地生良によれば、高みにいる「神」の話ではなく、日常の話ができるようになると、回復のプロセスが始まる——「向谷地 面白いのはね、そういう話をしていくなかに、〔身近な〕他者が出てこないんです。さっきの神様とのテレパシーもそうだけど、話題はつねに「テレパシーと神」なんです。／——神と1対1なんですね。／向谷地 リアルワールドじゃない「アナザーワールド」のなかでその関係に苦しんでいるんです。食事がまずいとかおいしいとか、誰々さんのことが好きだとか嫌いだとか、そういうリアルな現実との話がほとんど出てこないですよ。だから、そういう話が出てくると、「あっ、回復が始まったな」と思う。むしろ、そういうことをいかに起こしていくか、っていうことです。」<sup>2</sup>
- ・ フランスにおけるハイデガー受容。フーコー「『夢と実存』序文」、ラカン「ローマ講演」における垂直方向の重視（時間性、空談＝空虚な語り／充実した語り）
  - 垂直的な議論への抵抗としてのドゥルーズの表面論（『意味の論理学』）、『批評と臨床』
  - <sup>よこならび</sup>水平性と<sup>おしつけ</sup>垂直性をともに乗り越えるものとしてのガタリ、ウリの斜め横断性 (transversalité)
- ・ 治癒と日常性についての検討 → 『存在と時間』（以下、SZ<sup>3</sup>）を再検討してみる。

### II. ハイデガーの「気づかい」について

- ・ 水平方向の他者との関係が重要であるとして、それはSZではどのように論じることができるだろうか？ → 「気づかい (Sorge)」論 (SZ26節、およびGA21, 220-234を参照した。)

---

<sup>1</sup> 松本卓也 (2016) 「水平方向の精神病理学に向けて」、『at プラス』30号。なお、いわゆる「フランス現代思想」に対してハイデガーが与えた影響とそれに対する批判については、『創造と狂気の歴史——プラトンからドゥルーズまで』（講談社、2019年）にまとめた。

<sup>2</sup> 向谷地生良 (2016). 向谷地さん、幻覚妄想ってどうやって聞いたらいいんですか?(第1回)その神様ってどのへんにいるんですか? 『精神看護』 19(2), 137-142

<sup>3</sup> 以下の『存在と時間』の引用は、熊野純彦訳からのものであり、SZの後の数字は頁数/段落番号を指す。

- ・ 3つの気づかひの整理：

気づかひ (Sorge)	③本来的な顧慮的な気づかひ 垂範的顧慮 (vorausspringende Fürsorge)	他者への気づかひ
	② (非本来的な) 顧慮的な気づかひ 尽力的顧慮 (einspringende Fürsorge)	他者から気づかひを取去る／手もとにあるものを介した他者への気づかひ → 依存・支配
	①配慮的な気づかひ (Besorgen)	手もとにあるもの (道具) への気づかひ

- ① 「配慮的な気づかひ (Besorgen)」とは、「世界内部的に手もとにあるものに目くばりしながら交渉すること」(SZ121/330)。
- ② 「顧慮的な気づかひ (Fürsorge)」は、「現存在が共同存在としてかかわる存在者」への気づかひのこと (SZ121/330) であり、たとえば「食べるもの、着るものについての「配慮的な気づかひ」も、病んだ身体の看護も、顧慮的な気づかひである。「事実的な社会制度としての「顧慮的な気づかひ」〔=福祉→ケア〕…がじじつ緊急に必要であることは、顧慮的な気づかひが欠如した様態のうちに、現存在がさしあたりたいていは身をおいている事情に動機づけられたものである。たがいに協力し、反目しあい、また、たがいにそしらに顔をしあったり、すれちがったり、こころに懸けあわなかつたりすることも、顧慮的な気づかひの可能な様式である。しかも、最後に列挙した欠如と無差別という様態ことが、まさに日常的で平均的な共同相互存在を特徴づけるものにほかならない。」(SZ121-2/331)、 「そうした顧慮的な気遣いにあつては、他者は依存し支配される者…となる場合がある。…顧慮的な気づかひによって、共同相互存在はひろい範囲で規定されているけれども、そのような顧慮的な気づかひがかかわるのは、たいていは手もとにあるものの配慮的な気づかひにほかならない」(SZ122/332)
  1. つまり、他者の代わりに「してあげる」気づかひ。『論理学——真理への問い』においては、「非本来的な顧慮的な気づかひ」であるとされる。自らが配慮すべき事について、そのひとの代わりに「してあげる」という態度をとると、その他者の現存在は自らの気づかひを取り去られてしまい、固有な自己を喪失した「非本来的な現存在」にとどまってしまう (GA21, 223-4)。
  2. 池辺<sup>4</sup>は「「他者のために」という思いが判断の根拠であるにせよ、他者の代わりに問題を引き受けて問題の解決にあたることは、自らの価値観を他者に押しつけることを強いる。さらには当事者である他者の意志を押しえつけてしまうことにもなりかねない」ことから、これを「パターナリズム的な性格に満ちた顧慮」と呼ぶ。
- ③ 他方、「顧慮的な気づかひ (Fürsorge)」には、次のような本来的な可能性もある： 「この対極になりたつのは、つぎのような顧慮的な気づかひの可能性である。つまり他者の代わりに飛び込むというよりは、その他者の実存的な存在可能についての当人に先だつて飛び、他

<sup>4</sup> 池辺寧 (2007) 「ハイデガーにおける気づかひの概念——ケア論への応用をめぐる——」、『介護福祉学』、14巻1号

者から「気づかい」を取りさるのではなく、気づかいを本来的にそのものとして他者に与えかえすような顧慮的な気づかいである。それは本質的に、本来的な気づかいに——すなわち他者の実存に——かかわるものであって、他者が配慮的に気づかう〈なになに〉にかかわるものではない。そのような顧慮的な気づかいが他者を助けて、じぶんがその気づかいのうちにあることを見通させ、じぶんの気づかいに向かって自由になることを可能とさせるのだ。」(SZ122/333) <sup>5</sup>

1. 『論理学——真理への問い』においても「」、現存在が固有な自己を獲得することで他者にも効果が及ぶ「本来的な顧慮的な気づかい」であるとされる (GA21, 224)。

- つづく SZ27 節では、非本来的な顧慮的な気遣いだけが取り扱われ、そこから世人 (das Man) による平準化 (Einebnung)、公共性 (Öffentlichkeit) の議論が展開される。
- 次に本来的な顧慮的な気づかいが再び取り上げられるのは、単独化し、決意した現存在が、他者たちにとっての「良心」となる際の気づかいとしてである (SZ298/898)。

### III. 「気づかい」論の臨床的応用——現象学的精神病理学とケアの哲学の場合

- メダルト・ボスは、現存在分析家は「尽力的顧慮 (einspringende Fürsorge)」をしてはならず、「垂範的顧慮 vorausspringende Fürsorge」を目指すべきであると言う。

「かかる《尽力的な顧慮》を避けるようにとの注意に相応して、分析医のとるべき心構えについてのフロイトの積極的な規定は、本質的には以下のような意味になる。分析医は患者との関係においてつぎのような顧慮をしなければならない。つまり他人のために尽力するというよりは、彼のためにその実存的存在可能について先立って手本を示し (Vorausspringen)、彼から《悩み》(Sorge) を取り去るのではなく、むしろまさに悩みを悩みとして本来的に彼に返し与えるのである。かかる顧慮こそ他人をしてみずからが悩みのうちにあることを透見させ、それにむかつて自由になることを助けるのである。しかしながら現実には患者に対して人間として先立つ (voraus) ためには、医師自身がまず〈分析的純化〉をうけていなくてはならない。」<sup>6</sup>

- ベナーとルーベルに代表される現象学的看護論 (やそれを応用したケアの哲学) で重視されるのも、垂範的顧慮であり、彼女らはこれを「看護ケア関係における究極的な目標」とまで言う。「それは他者がこうありたいと思っているあり方でいられるようその人に力を与えるような関係あり、看護関係の究極的な目標をなすものである。」<sup>7</sup>
- ただし、榊原<sup>8</sup>は、ベナーとルーベルが称揚する垂範的顧慮について、「「前もってその他者の前で飛んで手本を示す (vorausspringen/vorspringen)」関係は、なるほどその他者と「向き合って」はいるかもしれないが、同じ方向を目指して共に歩もうと「寄り添う」関係にはなっていないこと、そして、「決意した現存在は他者たちの「良心」(» Gewissen « der Anderen) となることがありう

<sup>5</sup> ハイデガーは、この2つの配慮的な気遣い「のあいだで日常的な共同相互存在は保たれ、多様な混合形式を示す。それらを記述し分類することは当面の探究の埒外にある」(SZ122/335) と言いつつ、その混合形式については論じていない。

<sup>6</sup> メダルト・ボス (1962) 『精神分析と現存在分析論』、52-3 頁

<sup>7</sup> パトリシア・ベナー、ジュディス・ルーベル (1999) 『現象学的人間論と看護』、55-56 頁

<sup>8</sup> 榊原哲也 (2015) 「フッサールとハイデガー——ケアという事象をめぐる——」、『Heidegger Forum』、vol. 9

る」というハイデガーの良く知られた言明に、ある種の「押しつけがましき」を感じるのは私だけではない」と述べる<sup>9</sup>。

#### IV. 精神病理学的治療論における「非本来性」の重視

- ・ ビンスワンガー『人間の現存在の基本形態と認識 (Grundformen und Erkenntnis menschlichen Daseins)』(1942): ハイデガーのいう気づかいは愛が出てこないことを批判。「気づかひに対する愛の現象学的優位 (das phänomenologische Primat der Liebe vor der Sorge)」。
- ・ レーヴィット『共同存在の現象学』: SZでは「共同相互存在の本来的に積極的な可能性、すなわち一人称と二人称、〈きみ〉と〈私〉という相互性における存在が、かくてとおりに過ぎられてしまう」(196)。そして、「〔垂範的顧慮における〕解放という有意味な目的が果たされるのは、ひたすら、同等な考えをもつ現存在という前提にもとづく。すなわち、一者自身にとってと同等な意味で「じぶん自身が」問題であるような現存在にもとづく。したがってなお共通性が、実存的に単独化された様式にとっても、可能性の条件であるべきなのである。」<sup>10</sup>
- ・ ところで、向谷地が言っていた「食事がまずいとかおいしいとか、誰々さんのことが好きだとか嫌いだとか、そういうリアルな現実との話」は、よく考えてみると非本来的な顧慮的な気づかひである。この非本来的な気づかひの可能性については、これまでのケアの哲学では十分に扱われてこなかった。
- ・ ハイデガーは、『現象学の根本諸問題』のなかで、非本来的とされる「世人」の自己理解は真正でないわけではなく、「実存しつつ情熱的に諸物に没頭することの内部で、このように自らをもつことは、立派に真正であることができる」とも述べている (GA24, 228)。そして、現象学的精神病理学には、ケアの哲学とは逆に、まさにそのような非本来性に重きを置く議論があったと考えられる。
- ・ ブランケンブルク (1971)『自明性の喪失』のデカルト論: デカルトは、“見る前に跳ぶ”のではなく、“跳ぶ前に見た”。

「デカルトは、近代哲学の口火を切った彼の懐疑の試みを始める前に、まず当時の知識をくまなく身につけようと努力したと書いている。彼は、伝統的学説の妥当性について最初にいくつかの疑惑を抱いた後も、すぐさまこの実験へと飛び込んで行ったわけではない。一切の懐疑にもかかわらず彼はまず自分の教義を完全なものにした上で、次には理論的知識の全領域に加えて、さらにできる限り広範囲な自然な(生の)経験<sup>11</sup>を身につけるための旅へと出かけた。つまり彼はいわゆる「世間の人」となった。そしてその後にはじめて、彼の実験にとってどうしても必要な極限的な孤立を自らに課したのである。…彼が『方法叙説』の冒頭で、「健全な人間悟性」(良識)を宣言しているのも偶然ではない。彼によると、これほど公

<sup>9</sup> ちなみに、ボスは『ツォリコーン・ゼミナール』の前書きにおいて、「彼 [=ハイデガー] は、無私に愛し、他人を他人自身のために解放する垂範的顧慮 (vorausspringende Fürsorge) という最高の形の人間の共感 (Mitmenschlichkeit) について語ったり書いたりできただけでなく、それをむしろ模範的なやりかたで生きることもできた人だったのである。」(p. vii) と述べている。

<sup>10</sup> カール・レーヴィット (2008)『共同存在の現象学』、199 頁

平に分配されているものはこの世にないのである。」<sup>11</sup>

- ・ この統合失調症の顕在発症予防術は、基本的には、尽力的顧慮→平準化→単独化(→垂範的顧慮)というSZの筋書き通り。では、治療術は？
- ・ ビンスワンガーは、「思い上がり」による発病した統合失調症患者にとっては、「隣人」との関係が再構築されることが治療であると考えている。

「最後に出現した解決、それは愛、浄化、抵抗などの問題を、手段や目的を明確に意識した困難で気長な「心理学的」な仕事という軌道にのせてやる、ひとこと言えば、実践の世界へ移してやるという解決である。そしてわれわれはこういう解決法のみを「健全」だと称する。／人間仲間に向かって差し伸べられたこの救いと労働の用意にあっては、汝と共同世界とはついに宥和し、汝と沈鬱な世界との解離は消えうせ、この抵抗も、もはや苛酷さ、冷酷さ、軽侮、嘲笑などとしてではなく仕事の対象であり仕事により克服しうる「隣人」の悩みとして現われる。」<sup>12</sup>

- ・ ブランケンブルク『妄想とパースペクティヴ性』の治療論： 妄想を「パースペクティヴへの固着」という観点から捉える。すると、妄想の治療は、パースペクティヴの可動性や交換能力を獲得することと同義となる。それは、身近な他者が物事をどのように見ているかということを通じて、他者とのあいだの関係を作り直すことである。

「こうした見方からすると、妄想においてはそれぞれ独自の妄想的パースペクティヴへの固着が起っているのであるから、妄想とは結局、パースペクティヴ性の病的亢進以外の何ものでもないと推測されることになるだろう。言い換えれば、妄想とは、一種のアスペクトの歪み、あるいは「アスペクト硬化」であり、さらに簡単に言えば、パースペクティヴ交換の能力欠如だということになる。逆に言うと、われわれが、妄想に陥ることなく現実を把握できるのは、パースペクティヴ交換の能力のおかげであり、そうした現実把握は、できる限り多くのパースペクティヴを積み増ししていくことによってできあがるのだということになる。」<sup>13</sup>、「次のような簡単なことから患者と共同の作業をはじめてもよいのではないか。たとえばわれわれが患者に、まずは何か身近にある簡単な物を選んで、それにしばらく注意を固定したり、その周りを巡ってみたり、それをあらゆる方向から観察したりしてみるように言う。うまくいったら、次はもう少し複雑で意味のある物を選んで、同じことをしてもらおう。これを繰り返してみる。その次には、同じ病棟の患者や看護師（最初のうちは、患者とすでにある程度「なじみ」のできている人がよい）のところへ行って、その人たちに特定のことを尋ねてみるように言う。具体的に言えば、たとえば、その人の目には病棟はどのように見えているのか、その人の家族状況や職業上のキャリアをその人がどう見ているのか、といったことを尋ねてくるということをしてもらうのである。そのようにして、患者はいつも「他人の目でものを見る」ように心がける。こうしたトレーニングを、患者の日課とすることも可能であろう。」<sup>14</sup>

- ・ ここでビンスワンガー、ブランケンブルクが語っている治療論は、単独化→思い上がり→発病→尽力的顧慮（手もとにあるものを介した他者への気づかい＝非本来的な顧慮的な気づかい）の回

<sup>11</sup> ヴォルフガング・ブランケンブルク（1978）『自明性の喪失——分裂病の現象学』、112-113頁

<sup>12</sup> ルートウィヒ・ビンスワンガー（1970）『精神分裂病〈1〉』、51頁

<sup>13</sup> ヴォルフガング・ブランケンブルク（編）『妄想とパースペクティヴ性』、26頁

<sup>14</sup> 前掲書、34頁

復を目指すものである。

## V. クリッチリー「根源的な非本来性」説の導入

- ・ サイモン・クリッチリー (2017)「根源的な非本来性」: SZ をテキスト内在的に注釈し、ハイデガーの言う「被投的企投」には、「いかなる実存論的な企投によっても統べることのできない獣じみた事実性」<sup>15</sup>が取り憑いており、それゆえ、非本来的とされたものにも根源性が与えられなければならない、と読む。そうすることによって、SZ を「本来性の英雄譚から根源的非本来性へ」と「アспект変換」<sup>16</sup>することができる。以下にその重要な帰結を2つ引用しておく。

① 「しかしながら、もし私たちがハイデガーの描写を根源的非本来性という観点から見ると、多くが変化します。例えば、ハイデガーが「みんな」の世界では「[...] 誰もが他人であり誰も彼自身ではない」と書くとき、あるいはまさに日常的な現存在の「誰か」は〈Niemand〉、誰でもない、であると彼が言うとき、これらの語句は別様に解釈されるかもしれませんが。もしも私たちが本当に、社会的実存において私たち自身にとって他者であるのなら、さらにもっと私たちが特に誰でもないのであれば、それは何らかの思想にとっての基礎をうまく提供することがあります。それは、本来性・自己優越あるいは共同体主義的連帯の諸目標という観点からは組織化されないであろうような社会性についての思想です。／非本来性の観点からする『存在と時間』の読解が許すと思われるのは、社会的な生を、他者への根本的な依存性の関係から構成されたものとして見るということです。私は特に誰でもなくあなたも誰かでない、そして私たちがどちらも仕事へ行くのに「公共交通」を使う限り、私たちの相互的な諸行為を基礎づけるのはある共有された依存性であり、さらには礼儀です。…ポイントは、〈das Volk [民族]〉の本来性を要する非本来的なあるいは低落した「公共性」として〈das Man [世人]〉が見られる必要はない、ということです。」<sup>17</sup>

② 「私の『存在と時間』解釈によれば実存論的分析論の核心は、先駆的決意性を通じて本来的な全体性を達成する英雄的で係累の無い持続的な自己ではありません。逆に、有限性と良心の关系的な経験を通して形成される非本来的な自己と共に社会性が始まるのです。この非本来的な自己は、立ち上がって自分の宿命に出会うことができるような本来的で統合された自己ではなく、他者たちに依存する諸関係を通じて定義される自己であり、それは他者たちへの関係を通してのみ存在しているのであって、自分の運命に出会うにはつねに到着が遅すぎます。悲劇的と言うよりは喜劇的な自己です。」<sup>18</sup>

- ・ クリッチリーは、既存のハイデガー（読解）への一種の「逆張り」として、「他者たちに依存する」関係、誰でもないひと＝世人によって担われているような関係の重要性を主張してみせる。これは、垂範的顧慮を重視するケアの哲学とも、垂範的顧慮における共同性をみるレーヴィットとも、気づかいからは出てこない愛を重視するビンスワンガーとも異なる解釈である。
- ・ 以下、クリッチリーの表現を借りて、根源的に非本来的なほうの極にあるとされる顧慮的な気づかいを重視する可能性について検討してみたい。

<sup>15</sup> サイモン・クリッチリー（編）（2017）『ハイデガー『存在と時間』を読む』、256頁

<sup>16</sup> 前掲書、258頁

<sup>17</sup> 前掲書、268-9頁

<sup>18</sup> 前掲書、269頁

## VI. 無人島において、誰が気づかうのか？

- ・ しかし、そのような気づかいは、誰もがやすやすと手にしているものではないか？ 共同存在であるひとは、つねにすでに非本来的な顧慮的な気づかいはお互いにしあっているのではないか？ という疑問が出てくるかもしれない。
- ・ 実際、ハイデガーは、「共同存在は、他者が事実は目のまえに存在せず、知覚されていない場合であっても、実存論的に現存在を規定する」(SZ120/329)と述べており、現存在にとって気づかいはアプリアリに機能していることを強調している。
- ・ また、『形而上学の根本諸概念』においても、次のように主張される。

「一人の人間が実存するかぎり、彼は実存する者として既に他の人間たちの中へと移し置かれていのである。事実上近くに他の人間たちがいなくても、である。…他の人間たちに同行すること、他の人間たちにおける現存在に同行すること、としての、他の人間たちの中へと自分を移し置くことができること、このことは人間の現存在に基づいて——現存在として、常に既に生起してしまっているのである。…したがって、われわれ人間は自分を或る他の人間の中へと移し置くことができるか、という問いは、可能な問いではないゆえに、言うまでもない (fraglos) のである。」<sup>19</sup>

- ・ ハイデガーが共同存在のあり方について論じる際に参照しているのは、マックス・シェーラーの『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』であると思われる（熊野純彦の示唆による）。シェーラーもまた、人間の共同的なあり方が「アプリアリ」に与えられていることを主張しているのだが、その際に彼はロビンソン・クルーソーの物語を参照している。

「かくして各人はある背後根拠の上にあることに気づき、つねに同時に、時間的広がりにおいて出来事としての「歴史」と、同時的広がりにおいて社会的統一態と呼ばれるところのなかにかく集中化されている体験諸連関の総体性の「構成員」として自認するのみならず、——各人はまたこの全体のうちなる倫理的主体としてはみずからがつねにまたこの総体性のうちで倫理的に重要なものの全体に対する「共同活動者」、「共同人」として、かつまた「共同責任者」としても与えられている。」「これらすべてのことは厳密にアプリアリな命題であり、…この超越する作用がまた事実的経験のうちで「充実」を見出すかどうかは、この志向的な「ついで意識」の意味と本質にとってはどうでもよいことである。したがって認識＝理論的に虚構されたロビンソン〔・クルーソー〕でさえも、一般に人格をともに構成するある種の作用様式を具えた作用の経験的充実が欠けていることを体験している場合でも、自分が一つの社会的統一態のうちなる構成員であることをともに体験するであろう。」<sup>20</sup>

- ・ ここでトゥルニエとドゥルーズを導入するとどうなるだろうか？ ドゥルーズの「ミシェル・トゥルニエと他者のない世界」は、ダニエル・デフォーの有名な『ロビンソン・クルーソー』に取材して書いた哲学小説、『フライデーあるいは太平洋の冥界 (Vendredi ou les Limbes du Pacifique)』を論じたもの。シェーラー＝ハイデガーが、無人島においても共同存在というあり方が「アプリアリ」にないし「実存論的」に成立することを自明視したのとは反対に、トゥルニエが描く無人島では、他者がいなくなると、世界が構造化されなくなる。ドゥルーズによれば、他者は知覚を

<sup>19</sup> GA29/30, S. 301

<sup>20</sup> マックス・シェーラー『シェーラー著作集〈3〉』、232-3頁

構造化するものなのである<sup>21</sup>。

- ① 「他者は私の知覚の場の中の対象ではないし、私を知覚する主観でもない。それは何よりもまず知覚の場の構造であって、この構造がなければ、知覚の場の総体はいつものようには作動しなくなってしまう」（意味の論理学、下 235）
- ② 「ドゥルーズによれば他者は、私が知覚する対象や私が考える観念に沿って、「周辺的な世界を組織すること〔organisation d'un monde marginal〕」を可能にする（LS 下 231 頁）。たとえば、私が一度に見ることができる範囲は限られている。通りに立って建物を見れば、建物の正面しか見ることはできない。しかし、普段我々は、正面の壁の奥には建物が続いていて、部屋や廊下などがあると思っている。なぜそのように思い、信じ、想定することができるのかといえば、「対象の中で私が見ていない部分を、私は同時に、他者には見えるものとして措定するからである〔…〕」（LS 下 232 頁）。他者というものを想定すればこそ、見えない「周辺＝縁 margin」の部分を他者には見える部分として処理し、それが恒常的に存在していると想定することができる。…ならば、他者がいなくなるとどうなるのか？ つまりロビンソンはどうなったか？ ドゥルーズはトゥルニエの小説からロビンソンの台詞を引用する。「私の抱く島の光景は切り詰められて、この光景そのものと等しくなってしまう。私が島において見ないものは、絶対に知られないものである〔…〕」（LS 下 233 頁）。他者が欠けると、私に見えていない部分の知覚を支えてくれる者がいなくなる。もはや、自分には見えていないが他者には見えているはずだと想定することはできない。したがってその時、私に見えていないものは端的に存在しない。見えているものが世界であり、世界とは見えているものである。世界そのものが私に見えているものへと縮減する。」

- ・ 知覚の世界を構造化してくれる共同存在がアプリアリではないということは、単に無人島をめぐる思考実験によってのみ想定されるだけでなく、臨床的な対応物がある。自閉症者グニラ・ガーランドは、「例えば私は近所の家々にも内部があるということを知らなかった。すべては芝居の書き割りのように見えていたからである。自分の家の内部には空間があることは知っていたのに、そのちょっとした知識を向かいの家に結びつけることはできなかった。向かいの家は、紙と同じ、平面でしかなかった。」と述べている<sup>22</sup>。現象学者の村上靖彦は、「自閉症をもつガーランドにとって、見えないものは端的に存在しない。奥行きと裏側が存在しない」という。だが、「奥行きを認識できる定型発達の人間と、奥行きを認識できない自閉症者がいるわけではない。他者が存在しているところに生きている人間と、他者が存在していないところに生きている人間がいる」。ここから、國分は、世界の知覚が構造化されるためには類似的他者が必要であるという論を立てる。

---

<sup>21</sup> 國分功一郎「類似的他者——類似的他者」、『ドゥルーズの 21 世紀』、『ドゥルーズの 21 世紀』。もっとも、このような問題をハイデガーが論じることができなかったのは、彼がデカルト以来の他我問題を、共同存在という仕方で解決済みとする枠組みをとっていることに起因するのであり、いわば SZ の問題設定そのものから起因している。実際、他我を問題として問うフッサールの議論からはこのような問題を扱うことが可能であり、『デカルト的省察』第五省察において、対象の私に見えている面の現前と、私には見えていないが他者には見えている共現前（Appräsentation）とが「融合して、一つの知覚がもつ機能の共同性のうちで働いており、この知覚それ自体が同時に現前するとともに共現前しながら、それでも対象全体に対してはそれ自身がそこにあるという意識を形成している」（エトムント・フッサール（2001）『デカルト的省察』、218 頁）。

<sup>22</sup> グニラ・ガーランド（2000）『ずっと「普通」になりたかった。』、70 頁。フッサールもまた『デカルト的省察』において現前と共現前の例として「家」の前面と背面をあげていた（218 頁）

- ① 「さて、以上からひとつの結論を導き出すことができる。知覚の場は他者によって構造化されるのだった。私は自分には見えていない部分を他者には見えているものとして措定する。この措定はしかし、ひとつの条件が満たされることを要求している。どういうことか？ 自分には見えていない部分を他者には見えているものとして措定するためには、その部分を見ている他者が、世界を私と同じように見る者でなければならない。自分と同じように世界を見ている他者がいればこそ、見えていない部分をその他者に託すことができる。自分と同じように世界を見ているとは思えない他者、自分とは根本的に異なる他者には、自分の知覚を託すことはできない。自分がその他者のいる場所に移動したとしたらかくかくしかじかの光景が見えるであろうと思えなければ、自分の知覚をその他者には託せないからである。つまりドゥルーズの他者と知覚を巡るテーゼは、次の結論を内包していることになる。知覚の場を構成するために必要なのは、自分と類似している他者である。」
- ② 「自閉症者の知覚の様式はマジョリティのそれとは異なっている。したがって自閉症者はマジョリティのように他者と出会うことができない。自閉症者は自分に類似した他者を見つけることに苦勞する。すると、自閉症者の知覚は類似的他者を見つけることの困難という社会的要因によって規定されている可能性がある。」
- ・ むろん、厳密にハイデガーを読む立場からは、それでも自閉症者にもなんらかの他者の存在了解があり、顧慮的な気づきがある、と反論が来るであろう。もちろんそれは、ある。自閉症当事者のテンプル・グランディン<sup>23</sup>は、事物を「イメージで思考する」自分の特殊なやり方について、他者たちも同じようにしていると思っていたのだという。だが、そのような他者は、自分の経験を裏打ちしてくれず、さまざまな場所で困難を引き起こす。
  - ・ フッサール『デカルト的省察』での扱いはどうか？： 人間的な有意味性をもった世界は共同的に構成され、普遍的なものとなっているとしても、それは「別の共同体の出身者には閉ざされている」という。それゆえ、異邦人にとっては、「異なる世界に属する人間を、当然のように人間一般として理解し、何らかの文化的世界に属する人間として理解する。そこから出発して彼は、これから先の理解可能性を一步一步作り出して行かねばならない」ことになる<sup>24</sup>。
  - ・ → 國分の議論は、いわば、同じ共同体に属してはいても、類似的他者が十分にいないことによって、同じ共同体のなかの異邦人とならざるをえないマイノリティのことを論じているのであり、彼らはやはり「理解可能性を一步一步作り出して行かねばならない」という困難を抱えている。
  - ・ このような考えは、自助グループの有効性を説明してくれる。アルコール依存や薬物依存のような困難を抱えた当事者が集まり、その中で自分の経験をお互いに語り合うという形で維持・運営されている自助グループでは、自分と同じ経験をしている人同士が集まっている可能性が高く、自分の経験を人に話すことを「恥ずかしい」と感じるものが少なくなる。自分の話を聴いてくれる相手が、自分の話を生々しい実感のこもった「リアル」な話として了解してくれる可能性が高まる。
  - ・ 注意すべきなのは、ここで働いているのが本来的な顧慮的な気づきではない、という点である。というのも、ハイデガーは、本来的な顧慮的な気づきは「他者が配慮的にきづかう〈なにに〉にかかわるものではない」(SZ122/333)と述べていたが、自助グループでまさに重要なのはそれ

<sup>23</sup> テンプル・グランディン (2010)「世界はあらゆる頭脳を必要としている」、TED トーク

([https://www.ted.com/talks/temple\\_grandin\\_the\\_world\\_needs\\_all\\_kinds\\_of\\_minds/transcript?language=ja](https://www.ted.com/talks/temple_grandin_the_world_needs_all_kinds_of_minds/transcript?language=ja))

<sup>24</sup> 『デカルト的省察』、238 頁

それぞれの困りごとについて、つまり、それぞれの現存在が配慮的にきづかっている「何か」について話し合うことであるからだ。

- ハイデガーは、非本来的な顧慮的な気づかいは他者に対する支配・依存を生み出しうるとした (SZ122/332)。しかし、「自分と類似した人がいるのだ」と思えることや、自分の知覚や経験を他者に託すことができること、という意味での依存は、決して否定的にのみ論じられることではない。もちろん、SZにおいても、非本来的な顧慮的な気づかいはアプリアリであり、不可避なものとしており、ハイデガーがそのような気づかいを否定しようとしたわけではない。しかし、それは不可避であるというよりは、現存在にとってのよすがであり、マイノリティにとっては獲得されるべきもの、「一步一步作り出して行かねばならない」ものなのだ。
- ハイデガーは「世人」への平均化を批判するが、逆に、「とりあえずの平均化」が可能になるよりどころとしての他者(=類似的他者)がいないこと、他者へ依存できないことのほうにより深刻な危機があるのだ。このことを十分に検討できなかったこと(「依存」と「支配」をなんの説明もなく並置してしまい、依存の肯定的な機能を検討できなかったこと)を、ハイデガーの「依存忘却」と呼んでよいのではないだろうか？
- この「依存忘却」については、(ケアの哲学ではなく)ケアの倫理から光をあてることができるだろう。近代的な自立した主体への異議申し立てとしてのその主張を、クリッチリーの根源的な非本来性と結びつけてみることも可能である。たとえば、次のような主張がなされている。
  - ① 「「依存」という状態を「人間にとってあってはならない例外的な状態」で「できうる限り克服すべき状態」と見なすのではなく、誰もが経験する当たり前の状態と見なすことから出発する」<sup>25</sup>
  - ② 「ケアの倫理は、わたしたちはつねに関係性の網の目の中にあり、決して完全に自立したり、自足的であったりするわけではなく、つねに依存と相互依存の関係を結んでいるのだと主張します。正義に基づく倫理は、先ほど述べたように、自律的で自立した道徳的主体に始まり、そうした主体が、同様に自律的で自足した主体との相互行為をする、と考えます。それに対して、ケアの倫理は、不均等な力関係に編み込まれています。」<sup>26</sup>
- いずれにせよ、依存にやすやすとあずかれない人のことが視野から外れていることがSZの問題なのだ。言い換えれば、ハイデガーの問題点は、他者論がないところにあるのではなく(SZの中に間違いなく他者論はある)、他者論のなかにおける「依存忘却」にある。つまり、首尾よく依存できていない人がいることを無視し、依存において何が起きているのかを問うていないことが問題なのである。
- Cf. ヒューバート・ドレイファス『世界内存在——『存在と時間』における日常性の解釈学』：世人(das Man/the one)の概念には、デイルタイ由来の「社会現象の肯定的機能」と、キルケゴール由来の「「公衆」の体制順応主義と凡庸さの否定的帰結」の両者が区別されていない<sup>27</sup>。それゆえ、ハイデガーは「構成的な順応性(conformity)と有害な順応主義(conformism)」とを区別しなかっただけでなく、「『現代の批判』におけるキルケゴールの大衆攻撃に感化され、この重要な区別をぼやけさせてしまうのにどんどん手を貸してしまう」。それゆえ、「世人の肯定的機能」

<sup>25</sup> エヴァ・フェダー・キテイ (2011)『ケアの倫理からはじめる正義論』、126 頁

<sup>26</sup> 前掲書、47 頁

<sup>27</sup> ヒューバート・ドレイファス (2000)『世界内存在——『存在と時間』における日常性の解釈学』、164 頁

としての「理解可能性の源泉としての順応性」と、「否定的機能」としての「均等化としての順応主義」を区別することが必要であるという<sup>28</sup>。

## VII. 頽落と存在免責の効用——クリッチリー説の自助グループへの応用

- ・ SZの共同存在についての考えは、共同存在としてのあり方がア prioriに成立していない<sup>29</sup>マイノリティのことを十分に考えてきていない。その点について、私たちは國分の議論を参照しつつ、クリッチリーと共に、SZにおいて非本来的とされていた「依存」に、新たな肯定的な意味を与えてきた。ここから、SZの他の概念にも別の視角からアプローチすることができるだろう。それは、「平準化／均等化 (Einebnung)」である。
- ・ SZにおける平準化についての記述を、「これまで依存に預かれなかった人々が、類似的他者との出会いを経て、ようやく安心して依存できる場所を見つけた」ものとして解釈してみる。これは、これまでのSZのイメージを更新すると思われる。
- ・ (非本来的な) 顧慮的な気づかい→平準化→不安→単独化→呼び声→負い目→歴史→「民族」に奉仕する共同相互存在、というSZの議論の流れはハイデガーのナチス関与と結び付けられてきた。たとえば、アドルノの本来性批判<sup>30</sup>は、彼が「同一性」や「全体性」を密輸入していることへの批判であり、それは私たちの関心から言い換えるなら、ハイデガーの議論が結局のところマジョリティ的であることにほかならない。だが、私たちは、SZを類似的他者との出会いが乏しいマイノリティについての、きわめて個別的な記述として読むことを提案したい。
- ・ 依存症をはじめとする各種の自助グループに長年関わってきた信田さよ子によれば、AAなどの自助グループに参加していると「自助グループ用語」のような言い回しになってくる(語尾に「ね」を付ける、「ミーティングでおろす」「吐く」「つながった、つながる」等)という。これはまさに、SZが述べているとおり、「共同相互存在そのものが平均的なありかたを配慮的に気づかう」(SZ127/351)からである。もちろんこれは、SZにおいては誰でもない世人によって人が平準化されるということと結び付けられているが、「依存忘却」の視点から読めば別の景色が見えてくる。

「自助グループ参加の意義・効果は自己開示をして経験を共有することにあるが、彼らや彼女らの言葉の変化を知るにつけ、独特の語法や言い回しを模倣し使いこなせるようになることがその第一歩ではないかと思わされる。一種の符牒のような言い回しであるが、それを使うことでグループの一員になるのだ。おそらく日本でAAが誕生して以来、メンバーの誰からともなく言い始められ、すたれることなく生き残ってきた言い回しなのだろう。それを

<sup>28</sup> 前掲書、176頁

<sup>29</sup> このような言い方がハイデガーの議論を逸脱するように思われるなら、先程のテンブル・グランディンの例を念頭に置きつつ、「首尾よく成立していない＝首尾よくない形ではとりあえず成立している」程度に読み替えられたい。

<sup>30</sup> 「〈気遣い〉を、〈現存在の構造全体の全体性として〉〈存在論〉的に規定することによって、〈そこ〉に個別的存在しているもの (das einzelne Dasein) を〈現存在 (Dasein)〉に移し置き、それによって既に〈全体性〉が取り決められてしまっているということ、そうしておいたうえで、それをくみだしく開陳しているにすぎないということ——この点に、ハイデガーは歩みを止めて思いをめぐらすことはない。」(テオドル・アドルノ『本来性という隠語——ドイツ的なイデオロギーについて』、172-3頁)

新メンバーが模倣し、自らの経験を表す言葉としてグループで活用していくのである。」<sup>31</sup>

- ・ さらに、信田によれば、自助グループでは、過剰な責任（100）を負わされている状態から、「あなたに責任はない」と言われ免責されたイノセンス（0）の状態になり、そこからはじめて中間地点（50）にある適正な自己責任に戻ることができるのであるという。

「ACのグループカウンセリングで回復について説明する際、トラウマからの回復といった視点ではなく、親（加害者）を研究することと、責任をめぐる視点の転換をキーワードにする。前者についてはすでに述べているので省略するが、後者については、過剰な責任を負わされてきた状態（100）から「あなたに責任はない」としていったんイノセンス（0）の地点にまで戻すという説明をする。これを線上に100→0へと示し、座標の端から反対の極に移動させる。その後、中間地点に50と印、それを「適正な自己責任」とする。回復とは0から50の地点に近づくことだと説明する。／…イノセンスの自覚は欠かせないが、あくまで通過点（もしくは出発点）なのであり、そこにとどまり続けることは却って新たな問題を引き起こす可能性もあると伝える。…／いったん被害者の立場に身を置くことは、重圧から解放され、これまでの苦悩への意味が付与され、親からの脳内支配にも似た洗脳から脱する出発点になる。しばしば「親を責めてもいいでしょうか」と質問されるが、いったんそれは肯定されるべきだと思う。しかし親への怒りは噴出し始めるとエンドレスにもなりかねず、そのことで逆に批判されて病気扱いされることは珍しくない。責めて怒りを放出することで、新たな執着関係が発生することもある。望ましいのは、イノセンスを十分に受け止められる安全な他者（専門家）がその役割を担うことだろう。」<sup>32</sup>

- ・ 同様の事態は、当事者研究においても観察できる。免責からの「責任の生成」。自助グループや当事者研究の経験を参照すれば、存在免責があるからこそ責任が生成してくるのである<sup>33</sup>。

「当事者研究において重要な点の一つが、外在化を前提にしたメカニズムの解明ということですね。つまり犯人さがしをしない。そして二つめとして、行為や状況を「現象」として捉えたうえで、その現象の研究結果を仲間に向けて発表する。発表を通じて自分がいったいどういう困りごとを抱えているかを仲間と共有し、なぜそうなっているのかを共に研究、解明していく。…不思議なことに、一度それらの行為を外在化し、自然現象のようにして捉える、すなわち免責すると、外在化された現象のメカニズムが次第に解明され、その結果、自分のしたことの責任を引き受けられるようになってくるのです。このことが、当事者研究によってわかってきた。とても不思議なことですが、一度免責することによって、最終的にきちんと引責できるようになるのです。」<sup>34</sup>

- ・ くわえて、当事者研究においては、自分にとっての「苦勞」となっている「現象」を外在化し、それがその当事者にとってどのようなものであるのかが語られる。そして、その語りを「聞いている側が変わる」。これは、「〔他者の〕手もとにあるものの配慮的な気づかい」（SZ122/332）にこそ、重要性が置かれるべきだということを示しているのではないか？<sup>35</sup>

<sup>31</sup> 信田さよ子（2014）『依存症臨床論』、193-4頁

<sup>32</sup> 前掲書、168-9頁

<sup>33</sup> 一対一の面接を基本とする精神科臨床においてもまた、近年、暴力や虐待によるトラウマ、あるいは発達といった問題が全面化するなかで、「まずは免責をする」という手順を踏むことなしに治療をすすめることは困難となっている。

<sup>34</sup> 國分功一郎、熊谷晋一郎（2021）『〈責任〉の生成——中動態と当事者研究』、43頁

<sup>35</sup> 「押しつけがましい」箇所も、自助グループにおける「先ゆく仲間」との関連から解釈できるかもしれない。

- ・ 他者と責任をめぐるこのような記述は、SZ の読者にとって非常に興味深く映るはずである。ハイデガーは、世人は現存在の「責任を奪いとってしまう」=現存在を「存在免責 (Seinsentlastung)」(SZ127/353) するのであって、そこから支配が強まる (SZ128/354 以降) のだという。そして、多くの場合、不安が生じることによって現存在は単独化し (SZ187-8/543)、頽落から連れ戻され (SZ191/552)、非本来性と本来性が二つの可能性としてあらわになるとされる。
- ・ ところで、ハイデガーは、単独化によって「配慮的に気づかわれたものもとの存在のすべて、他者たちとのあらゆる共同存在が、ものの役にもたない」ことがあらわにされるが、それでも「配慮的な気づかいと顧慮的な気づかい…は、実存一般を可能とする条件に属している」(SZ263/788) と言っていた。この両義性に注目してみる。
- ・ クリッチリーは、ハイデガーの言う「被投的企投」には、「いかなる実存論的な企投によっても統べることのできない獣じみた事実性」が取り憑いていると主張した。それにならって、自助グループや当事者研究は、単独化には他者が——それも、(非本来的な顧慮的な気づかいをし合う) 他者が——取り憑いていることを教えてくれているのではないか?
- ・ このような読み替えは、ハイデガーの「単独化」の概念と衝突するかもしれない。だが、共同存在が「ものの役にもたない」ように見えているのは、ハイデガーの依存忘却によるのだとすれば、単独化によって現存在は頽落から「連れ戻される」のではなく、実際には、他者とともにある頽落は取り憑いたままなのではないか。だからこそハイデガーはこの箇所「この単独化によって現存在はその頽落から連れ戻され、現存在にとって本来性と非本来性が現存在の存在のふたつの可能性としてあらわになる」(SZ191/552) と述べたのではないか——必ずしもどちらかを「選び取る」のではないような仕方か? その意味で、「頽落が露呈するのは、現存在そのものの、その本質からする存在論的な構造である」(SZ179/516) と言えるのではないか。
- ・ たとえば、次の箇所は、自助グループにおいて他者とのあいだに手もとにあるものを介した配慮的關係とともに、顧慮的關係をも結びなおすというふうに読めるかもしれない。

「決意性は、本来的な自己存在として、現存在をその世界から引きはなすものではなく、現存在を宙に浮いた自我へと孤立化させるものでもない。…決意性は自己をまさしく手もとにあるもののもとのときどきに配慮的に気づかう存在のうちへともらし、たほうで自己を他者たちと共にある顧慮的に気づかう共同存在へと押しもどすのだ。」(SZ897)
- ・ もっとも、自助グループにおいても、「一度システムを作れば終わり」というわけではなく、「制度内で起きることについての永続的な分析」<sup>36</sup>が必要であり、つまりは現在私たちが行っている実践が硬直したものになっていないかどうかについての絶えざる問い直しが必要となる。ハイデガーは、おそらくはそのような不断のプロセスを「非決意性のうちへと喪失されているほからなぬありかたが、実存的に掘りくずされ」(SZ308/923) ると表現したのではないだろうか。

<sup>36</sup> ジャン・ウリ (2016)『精神医学と制度精神療法』、春秋社、287 頁